

あお やぎ しゆく 青 柳 宿

江戸時代、参勤交代の制度が義務化されてのち、各地の街道、宿駅は大きく整備されました。筑前には長崎街道・唐津街道など6街道に27宿あり、青柳宿は唐津街道（小倉～福岡～肥前唐津、長崎街道に対して内宿通りと呼ばれました。）の中の一宿場として成立しました。

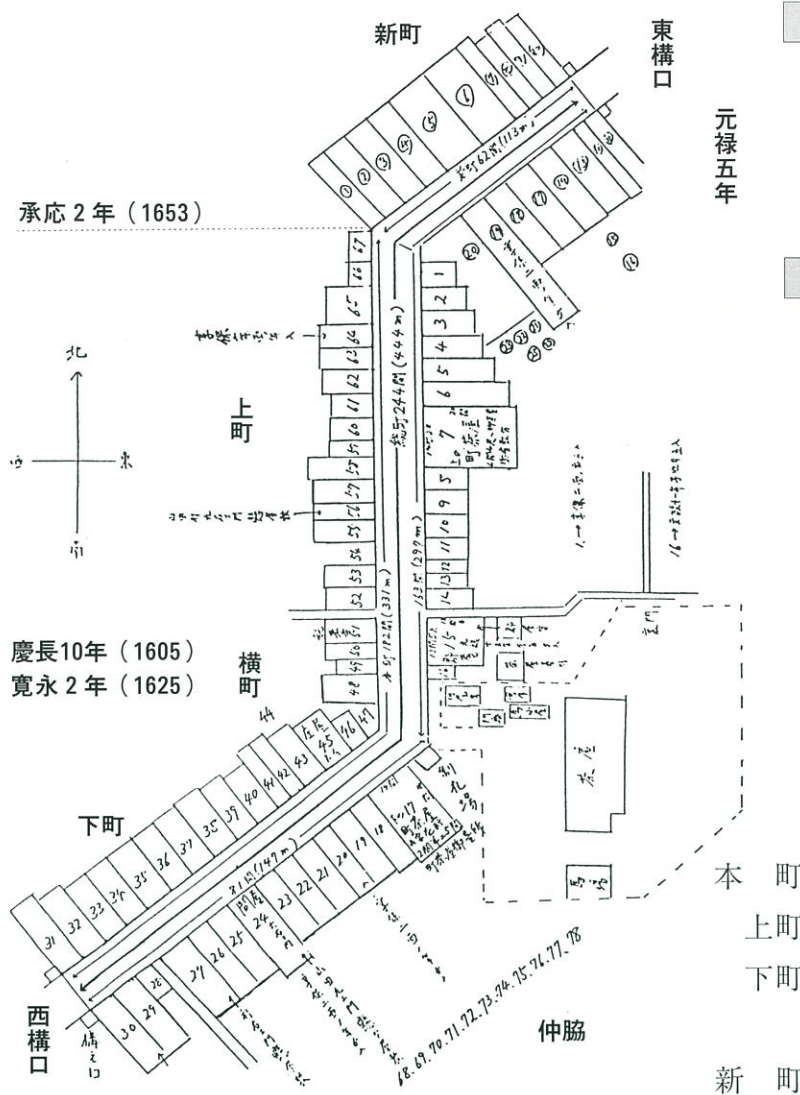


二川秀臣氏の版画

慶長10年（1605）ごろ、御茶屋を中心としてまず川原村の住民によって上町が、青柳村良仙寺の住民によって横町ができ、寛永2年（1625）に下町、仲脇が青柳村古屋敷の住民によって作られ、本町ができあがりました。承応2年（1653）に藩命により新町が加わり、三段階に分けて成立した宿は、総延長244間（444m）・道路に面した家並み84軒規模で、元禄時代初期にはその町並みが完成しました。宿は江戸時代に2度、明治になって1度の大火に見舞われ、その大半を焼失し、現存資料もほとんどなく、宿の出入り口としての構え口の遺構〈平成15年3月20日 市文化財指定〉・鉤型の道路と間口の狭い家並みが、往時の面影を残しています。



青柳宿全景（復元模型）



青柳宿の規模

| | |
|-------|-------------|
| 総延長 | 244間 (444m) |
| 本町の長さ | 182間 (331m) |
| 新町の長さ | 62間 (113m) |

家数

元禄5年 (1692) 頃 103軒
 元禄8年 (1695) 頃 98軒
 このうち道路に面して家並みを形成している家は84軒 (本町66軒、新町18軒) 江戸時代を通じて84軒ぐらいの家並みでした。

上町・横町……慶長10年頃 (1605)
 下町・仲脇……寛永2年 (1625)
 新町……承応2年 (1653)

元禄時代の町並み図

宿場の構成

御茶屋…大名が泊まる宿駅の旅宿。一般に本陣と称しますが大阪以西では御茶屋といいました。管理者である御茶屋奉行が置かれてましたが、宿泊する大名や幕府の役人の接待にはあたらず、その役は御茶屋守があたりました。

町茶屋…宿場の民間人が屋敷を藩に提供し、御茶屋守として任にあたりました。大名の家臣、武士、一般町人も泊まり、青柳宿には上下に1軒ずつありました。下の城戸氏宅には当時の宿札三枚 (薩摩中将休、松平閑叟休、黒田三左衛門宿) が現存しています。

宿場内には他に、郡の役所であった郡屋、人馬の継ぎ立てをした問屋、高札や次の宿までの里程・料金等が掲げられた制札場などがありました。



平成14年当時の構口跡